鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

鹿大広報

https://www.kagoshima-u.ac.jp/

動画配信中!!

鹿大ジャーナル movie One Minute

特集

薩摩からSATSUMAへ
～世界へ羽ばたく グローカル人材育成への挑戦～

NO. 215
2020 AUTUMN

特集

薩摩からSATSUMAへ

～世界へ羽ばたくグローカル人材育成への挑戦～

対談

鹿児島大学
第13代学長
佐野 輝

少子高齢化に伴い、さまざまな業種での人材不足が叫ばれる一方、AIなど技術の進歩により人的資源が不要となる業態が出現するなど、就業を取り巻く環境が大きく変化しつつある。地域に根ざし、地域とともに歩む本学においては、時流を見据えた人材育成は大きなテーマの一つである。今回、佐野輝学長の対談相手として島津家第33代・島津忠裕氏（株式会社島津興業代表取締役社長）をお迎えし、中島宏広報センター長（法文学部教授）の司会進行のもと、地域と本学の目指すべき人材育成を主なテーマとして意見が交わされた。

※本対談は2020年7月20日、島津氏のご厚意により、島津家別邸仙巌園「謁見の間」において執り行われました。なお、対談はマスク着用にて行い、写真撮影時のみ一時的に外しております。

薩摩の歴史を支えた「教育」

佐野輝 鹿児島大学学長　本日は歴史と文化の薫り漂う島津家別邸 仙巌園にて貴重な対談の機会をいただき、誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、世界中のあらゆる業種に大きな影響がありました。本学においても、創立以来初となる卒業・修了・入学式の大幅な規模縮小をはじめ、長期にわたる休講、オンライン講義・会議、在宅勤務等、これまでの生活様式を大きく変えざるを得ない状況に置かれました。しかしながら、移動時間の節約や超過勤務の削減等、非常に利する点を感じられたのも確かです。とくに数多くの離島を有する本県の地理的距離を克服する上でのIT、ICTの有効活用など、新たな生活様式実現の可能性についても大きな手がかりが得られ、研究活動面においては、新型コロナウイルス感染症治療薬開発の手がかりや、迅速で有効な臨床検査法の発明という成果も挙げました。今後とも「地（知）の拠点」としての役目をしっかり果たしていきたいと考えています。

島津忠裕社長　仙巌園も4月中旬から7月末まで休業しましたが、3ヶ月に及ぶ休業は設立98年で初めてです。「忍の一字は衆妙の門」という言葉のとおり、耐え忍ぶことは成功の礎と捉え、社員には資格の取得や指定図書の読書を奨励しました。

一方、県民限定のプライベートツアーを実施して、新サービスについてモニタリング調査を行い、営業再開後のサービス向上の糧にしたいと考えています。日の当たらない時こそ爪を研ぐ時と思い、この期間を過ごしています。

中島宏 広報センター長　本日は、大学が担う重要な役割の一つである「教育＝人材育成」をメインテーマとして設定しました。人材育成は、鹿児島の歴史においても重要なキーワードですので、その辺りのことも含めてお話しください。

佐野　本学の起源は、第8代薩摩藩主を務めた島津家第25代当主・重豪公が創始された藩学造士館にさかのぼります。造士館が廃止された期間がありましたが、忠義公（第12代藩主、島津家第29代当主）のご篤志により1884年、鹿児島県立中学造士館として復活しました。本学の歩みは、まさに島津家の御恩に育まれてきましたこと、深く感謝申し上げます。代々才能に優れた当主を輩出してきた島津家ですが、集成館事業をはじめ近代日本の礎となる数々の事業を推進した第一人者はやはり斉彬公かと思います。どのような人物であったとお考えですか？

島津　国際情勢や西欧技術について、学びの環境や人的ネットワークに恵まれた人物だったと思います。斉彬の学びに大きな影響を与えた人物は二人いると思います。

一人目は、お話に出た島津重豪。西洋文明に強い関心を持ち、個人的な趣味にとどまらず、蘭学を組織的に導入、藩に普及させた人物で、江戸の蘭学者・オランダ通詞・蘭方医と交流を持ち、独自のネットワークを築きました。斉彬は重豪の薫陶を受けて育ちますが、重豪の蘭学者ネットワークから西欧の科学技術を学ぶことができたと思います。学長は兵庫県のご出身とのことですが、三田藩（現・兵庫県三田市）の蘭学者 川本幸民を江戸藩邸の学問所の塾長として招き、集成館事業の協力を仰いでいます。

もう一人は、当時の佐賀藩主 鍋島直正です。江戸中期以降、島津家は大名家と積極的な婚姻政策を進め、幕末には佐賀藩の鍋島家と親戚になっていました。佐賀藩は長崎、薩摩藩は琉球王国の防衛において、西欧列強の進出の脅威という共通の課題に直面していたため、両藩は日本のなかでもいち早く近代化を進めました。斉彬と鍋島直正は年の近い従兄弟同士だったため非常に親しく、反射炉の建設において、斉彬は直正から技術援助を受けています。今は新型コロナウイルスが流行していますが、当時は天然痘が流行していました。嘉永2（1849）年に佐賀藩が種痘に成功すると、直正は斉彬に痘苗（ワクチン）を送り、斉彬は江戸藩邸で種痘を施しています。

斉彬が近代化事業を進めること

― 対談会場となった別邸 ―

ができた背景には、重豪や直正のような人的環境に恵まれていたことがあったと思います。

佐野　斉彬公は藩主の座に就いていたわずか7年半の間に、数々の業績とともに西郷隆盛をはじめとする幾多の人材も育てました。タイムマシーンが発明されたら、真っ先にお会いしたい人物です。

島津　斉彬時代の集成館事業は鎖国体制下で、輸入も技術者の招聘もできず、手探り状態で進めざるを得ませんでした。そのため失敗の連続で、例えば反射炉も実用化まで6年かかっています。途中で技術者たちが「自分たちでは無理だ」と訴えますが、斉彬は「西欧人も人なり、佐賀人も人なり、薩摩人も同じく人なり。退屈せずますます研究すべし」と逆に激励したそうです。絶対に成功させるという明確な意図を持ち続け、失敗してもその原因を徹底的に究明して完成に結びつけたのだと思います。本日、H2Aロケットの打ち上げが成功したと聞いています。2つの射場を有する鹿児島の大学がロケット開発を進めるのは地域社会にとって大きな意義がありますので、鹿児島ロケットの関係者も、先人の気概を持って大願成就に結びつけていただきたいと思います。

鹿児島大学における人材育成

中島　では次に、鹿児島大学における人材育成について話を進めたいと思います。

佐野　人材育成のモットーとして掲げているのが「グローカル人材の育成」です。代表的な取り組みが、「21世紀版薩摩藩英国留学生派遣事業『UCL稲盛留学生制度』」です。幕末、薩摩フィフティーンと呼ばれる若き留学生が遠くロンドンへ羽ばたいた歴史にあやかって昨年、創設しました。本学の誇るべき卒業生である稲盛和夫氏から寄せられた京セラ株を原資とする運用金を活用し、毎年1～2人の学生に対し英国ロンドン大学への留学を支援します。もう一つ、「米国から鹿児島、そしてアジアへ～多極化時代の三極連携プログラム」という留学生相互派遣事業も昨年、文部科学省の教育認定プログラムに採択されました。現在、海外留学や海外への派遣・受入等が思うようにいかないところですが、後者の三極連携プログラムについてはオンラインによる運営を進めています。

　各学部の教育カリキュラムにおいても教育改革を進めており、教育レベルの国際標準化を目指しています。工学部においては、世界水準の技術者養成に対するJABEE認証をいち早く取得し、医学部においてはJACME（日本医学教育評価機構）による認定を獲得しています。さらに昨年12月には、共同獣医学部がアジアで初の欧州獣医学教育認定（EAEVE認証）を取得しました。入学者については国際バカロレア（IB）選抜や外部英語入試を活用し、英語教育の充実と教育の国際標準化を図っています。

島津　鹿児島を中心にした地図（右下図）を南北逆にしてみると、古来、鹿児島は東京ではなくアジアを見ていたということがわかります。地理的な優位性は普遍的なものですので、国際的に打って出るというのは、鹿児島が生き残っていくための大きな必要条件だと思います。

－ 南北逆にした地図 －

中島　世界へ羽ばたく力を身につける一方、地域に根ざした教育プログラムの充実も図っています。その内容について学長よりご紹介をお願いします。

佐野　本学では「かごしまキャリア教育」「かごしま地域リサーチ」「かごしまグローバル教育」の3プログラムから成る「地域人材育成プラットフォーム」を策定しています。最大の特徴は1年生全員に必修科目「大学と地域」を課していることです。オンライン授業により、全学部の1年生およそ2000人が一斉に受講します。講師には鹿児島県知事など外部有識者をお招きするほか、本学役員

による講義も設定されています。私も「鹿児島学事始」と題し、まさに島津様の示された地図のように、世界、アジアに向かって開く鹿児島、という視点を踏まえて授業をしています。

中島　地域人材育成プラットフォームにおいては、島津様に講師をお務めいただいたことがありますね。

島津　「かごしまキャリア教育プログラム」の「就業力科目」の中の「企業活動基礎」という科目の講師を務めさせていただきました。「企業活動と経営」というタイトルで、顧客満足度調査を経営でどのように活用していくのかという話をしました。具体的には、顧客満足度アンケートを指標化し、統計学の多変量解析を用いて分析していくもので、マーケティングと統計学とが合成されたような話です。課題解決力を身につけた人材とは、文系・理系を問わず学際的なカリキュラムを収めて理論と現場を往復できる人であるという話をさせていただきました。

― 対談中の様子 ―

佐野　お祖父様に当たる忠秀様も水産学部において長らく講義を行ってくださったと聞いています。島津家はDNAに脈々と教育熱をお持ちなのだと思います。

観光経営に求められる人材

中島　次に、観光経営人材の育成と観光産業ならではのご苦労、とりわけ今回のコロナ禍によるご苦労や、新たな発見についても併せて伺えればと存じます。

島津　付加価値の高い観光サービスのあり方について、5年前から、県外の観光系大学の教員を招いて、若手社員を中心に勉強会を重ねてきました。仙巌園は県民客の割合が1割、という弱点を解消するため、6月の休業期間中を利用して、県民向けのモニタリングツアーを実施しました。参加者280名を対象に「なぜ仙巌園を利用しないのか」「どのようなサービスがあれば利用するか」を重点に聞き取り調査を行い、分析をしています。また来園者の4分の1がインバウンドのお客さまですが、回復の長期化は必至です。当面は、346万人といわれる在留外国人市場、とりわけ欧米豪の開拓を進めていこうと考えています。ジャーナリストやライターなど発信力のある方や旅行経験が豊富な方にアプローチを始めています。

観光業は裾野の広い総合産業なので、観光経営人材という特別な存在があるとは思っていません。ただ、観光の現場の多くは、女性・シニア・非正規社員といった人々によって支えられていて、外国人採用も進んで国籍も多様化しています。このような人々が心地よく働いて実力を発揮してもらう職場環境づくりが不可欠ですので、観光経営人材には理論と同じくらい共感力が欠かせないと思います。学生時代に共感力を磨くには、インターンシップによる実習が欠かせない。

観光MBAの創設など、観光に科学的知見を持ち込んで、観光を経営の観点から学べる環境整備が進んでいるのは歓迎するべきことですが、ビジネス理論を身につけることは必要条件であって十分条件ではありません。観光経営人材の育成には、理論と実習のサイクルが大切だと考えています。

佐野　私自身は観光学について専門的知識はありませんが、鹿児島に今も残る文化と歴史の薫りは、日本人として誇るべき部分だと思います。また本学はおよそ一万九千冊もの貴重な「玉里文庫」を所蔵していますので、これをデジタル化して公開するなど、島津家とタッグを組むことも視野に入れながら観光に生かしていくことができればと思います。

中島　さまざまな観光資源を有する鹿児島は、県内に世界自然遺産と世界文化遺産を併せ持っています。屋久島に次いで世界自然遺産登録を目指す、奄美・徳之島を含む世界自然遺産への関わりと期待

など、いかがでしょうか？

佐野　1993年12月の屋久島の世界自然遺産登録に向けた取り組みにおいては、本学の研究者らの学際的な協力があり、登録に至ったという経緯があります。また本学には、奄美地域をフィールドとして活躍する研究者も多数在籍し、希少な動植物や独自の文化の研究に取り組んでいます。今後も世界自然遺産登録に向け、大学として学際的、学術的見地からの協力、貢献を目指したいと思います。

島津　鹿児島大学は島嶼の自然環境や生物多様性の研究が盛んで、小野寺浩先生を中心とする「鹿児島環境学」という学術的価値の高い先行事例もあります。奄美・徳之島の登録が実現されれば、鹿児島は2つの世界自然遺産を有する国内唯一の地になります。鹿児島大学には、ぜひこの優位性を活かしていただきたいと思います。

中島　鹿児島の豊かな自然と産業との関わりということで、株式会社島津興業が創業以来継続されている林業のお話もお伺いしたいと思います。

島津　林業は当社の祖業で、県内4ヶ所に合計2500ヘクタールの山林を所有しています。この10年間で出荷先の多様化とともに出荷高も増加していて、観光事業と並んで注力しています。当社の特徴は、再造林率100パーセントを維持し、持続可能な森林経営を実現している点です。鹿児島県の再造林率は約4割と聞いていますが、輸入材の増加が国産材価格の低迷と林業の採算性低下を招き、林業者の事業継続意欲が減退して再造林率の低下を招いているという構造があります。2024年、森林環境譲与税（森林環境税）という新たな財源が創設されます。そうなると、地方自治体が民有林を集めて当社のような一般事業者にも造林の窓口が開放されますので、自社山林だけでなく県内の人工林の健全な維持にも努めていきたいと思っています。

佐野　本学は全国でも数少ない暖地演習林を2カ所有しており、教育関係共同利用拠点として活用されています。垂水の高隈演習林では、社会人を対象とした「林業生産専門技術者養成プログラム」を開講しており、さらにもう一段上の林業のプロフェッショナルをめざす次世代の林業マイスター養成を目的とする人材育成活動に取り組んでいます。林業は郷土にとって大切な産業ですが、後継者の問題が厳しく突きつけられている面もありますので、その辺りも踏まえ、大学として貢献していきたいと思います。

島津　当社でも高性能林業機械を導入するほか、鹿児島大学で研究が進められている林業ICTを活用して林業生産性の向上を進めていかなくてはならないと思っています。当社の林業部門のナンバー2は鹿児島大学出身です。鹿児島大学には、人材面、技術面での知見・成果についても大きな期待を持っています。

鹿児島という地域の特性と強み

中島　島津様には観光経営の視点から鹿児島と御社の特性や強み、学長には鹿児島大学の特性や強みをご紹介いただきたいと思います。

島津　よく「島津家はなぜ800年間も続いたのですか」と聞かれるのですが、それには領地が鹿児島だったからとお答えしています。「薩摩」という字は当て字で、「西端」と書いて「サツマ」と呼ばれたともいわれています。「大隅」は字のとおりですから、薩摩も大隅も「辺境」を表しています。この辺境を「陸の終わり」と解釈するか、「海の始まり」と解釈するか。そこで先ほどの地図が再登場するのですが、「島津」という苗字は海に関係しますので、「海の始まり」と解釈することにしています。鹿児島は海に開かれて海外に目を向けていた場所。中国やアジアに近いという地理的優位性を活用して、文明の交流や学習機会に恵まれた場所だと思います。同時に、国際情勢の変化に真っ先に直面せざるを得ず、危機意識や心理的エネルギーも高い地域だったともいえると思います。「辺境の革新性」という言葉があるように、辺境は外部・外国と接しているがゆえに、学習機会に恵まれ心理的エネルギーも高い。これは、鹿児島の普遍的な強みではないかと思います。

中島　島津興業株式会社の特性、強みについてもご紹介いただければ。

島津　先祖が800年間蓄積してきた資産を活用しているという点でしょうか。イミテーションを極力少なくして本物を使い活用している点は、ブランド力の形成に大きく役立っていると思います。ただ、「今いる地点が最高」だと勘違いしがちな企業文化でもあることも十分承知しています。変えてはならないこと以外は変えなくてはならないということは社内に周知しています。変えてはならない部分と変えなくてはならない部分の線引きをするのが私の役割。線の引き方を間違えると、いかに800年間築いてきた蓄積であっても持続可能な経営に結びつけることはできないと思っています。

佐野　本学の特性は、地理的な特徴を抜きにしては語ることができないと思います。島津様が言われたように、本土最南端、隅っこにありながらも南北600kmにわたる豊かな県土を有し、宇宙への発射基地が2つある、唯一の県であり、黒潮の文化も色濃く、島津藩政時代から人材育成にかけた歴史的意味合いが本学のバックグラウンドに強みとしてあると思います。そのなかで、地域を大切にしながらいかに世界に向かって羽ばたくか、この強みをいかに活かせるかを模索しております。

中島　最後に、鹿児島大学への要望などあれば、お願いします。

島津　観光業は大学生に非常に人気の高い業界と言われていますが、同時に離職率が高く、人材のミスマッチが指摘される業界の一つです。当社では、観光部門の採用においては学部学科を不問にしています。専門性よりも学生の人間性や基本行動、チャレンジ精神やリーダーシップ、コミュニケーション能力などを重視している裏返しでもありますが、一方で、ツーリズム産業論やマーケティング、経営戦略論、ロジカルシンキングなど専門科目の履修も期待したいところです。今後、企業側の求める人材像と大学側のキャリア教育、カリキュラム等、意見交換できる場があればいいなと思います。インターンシップについても、就業体験だけではなく、研究室で共同研究できる機会など内容のバリエーションが増えていくことを望みます。

佐野　貴重なご意見、ありがとうございます。鹿児島という地は歴史的な文化が混在し、宇宙への玄関口であるなど魅力的な素材がいくつもあり、関西出身の私もこの地に来てよかったと思っています。コロナを乗り越えながら、それらをうまく活かす運営を考えなくてはと思っています。また、産学官金と連携の場が広がっている時代であり、ぜひ手を取り合いながら、今後、我々も教職員一丸となり、島津様をはじめとする地域の皆様のご協力、ご助言をいただきながら「オール鹿大」で取り組んでいきたいと思います。

中島　本日は大変ありがとうございました。

島津 忠裕（しまづ ただひろ）
株式会社島津興業代表取締役社長

1996年 3月　慶応義塾大学経済学部卒業
1996年 4月　株式会社日本興業銀行入行
2002年 4月　企業再編により株式会社みずほコーポレート銀行に転籍
2004年 1月　株式会社島津興業入社
2008年 4月　同総合企画室長
2008年 6月　同取締役
2009年 6月　同代表取締役副社長
2015年 6月　現職

社外役職
鶴嶺神社宮司
裏千家淡交会鹿児島支部支部長

佐野 輝（さの あきら）
鹿児島大学学長

1981年 3月　神戸大学医学部医学科卒業
1985年 3月　愛媛大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士号取得）
1985年 4月　愛媛大学医学部助手
1986年 8月　米国ミシガン大学精神衛生研究所で研究に従事
1992年 1月　愛媛大学医学部附属病院講師
1993年11月　新居浜精神衛生研究所附属新居浜精神病院医師
1996年 9月　愛媛大学医学部助教授
2002年 9月　鹿児島大学医学部教授
2013年 4月　鹿児島大学医学部長（～2017年3月）
2017年 4月　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科長（～2019年3月）
2019年 4月　現職

潜入ルポ

学びの部屋

Lecture of the University

「初年次セミナーII」（共通教育科目）

総合教育機構　高等教育研究開発センター

森　裕生　助教

※授業中はマスクを着用されていましたが、撮影にあたって一時的に外していただきました。

プレゼンテーションによって探究の成果を表現する

本学においては、新型コロナウイルス感染症の感染防止策の一環として、今年度前期、大部分の授業を遠隔によって実施。大半の学生、とりわけ新入生は、キャンパスを訪れる機会を得難いことから、後期授業においては万全の感染症対策の下、全学で10月、12月のスクーリング（対面授業）期間が設定された。10月初旬、半年ぶりに学生の活気が戻ったキャンパスを訪れ、1年生を対象とした「初年次セミナーII」の第1回講義風景を覗いた。

今年度初の対面授業

「私自身、緊張しています」。この日、授業を担当する森裕生先生は、アクリル板越しに声を弾ませる。参加しているほとんどの学生は、入学後、初めて参加する対面授業。密を避けるため、受講生の半数が出席。残りの半数は、この時間も遠隔による学習を進め、教室に集うのは次週となる。

「初年次セミナー」は、初年次教育の一環として新入生を対象に2016年度より開講。前期開講の「初年次セミナーI」では、調査方法、論証の構造、レポート作成上の表現法など、論証型レポート作成を通して大学での学び方について基礎知識を学習。「初年次セミナーII」では、倫理や法律など「スチューデントスキル」についても学びを深め、各自の探究の成果をプレゼンテーションという方法によって適切に表現するスキルを学ぶ。通常は、学生のグループワークやディスカッションを取り入れたアクティブラーニングが主の授業だが、今年度前期の授業は遠隔授業で進行。後期に設けられた2回のスクーリングは、学生と教員、学生と学生の貴重な対面の機会になる。

プレゼンテーションとしての自己紹介

「せっかく集まってもらったのですから、私が90分話すのではなく、皆さんに自己紹介を題材にしたプレゼンテーションを考えてもらいます」。密を避ける上で、グループディスカッションの代わりに森先生が実施したのは、「プレゼンテーションとしての自己紹介」である。まずは、先生自身が体験した研修会や講義などの模様が紹介され、プレゼンテーションの意味についての考察が深められる。「わかりやすく意見や考えを伝える、知識を共有する、といったことを前提として、その後の有意義なディスカッションのための情報提供、という意味合いも意識していただけたら」。実践を踏まえた森先生のメッセージが伝えられる。

いよいよ自己紹介を行う。まずは参加の学生全員で円をつくり全員が空間を共有する。自己紹介プレゼンの持ち時間は各自1分。名前と所属、出身を必ず含めるほかはフリートークで、とにかく1分は話し続けるというルール。「聞き手は聞いてみたいことや気になったことがあれば、その場ですぐに質問したり、つっこみを入れてください。つっこみに対応した時の何気ない言葉がきっかけとなって印象に残り、仲良くなるということもあります」と森先生。予定調和ではない、臨機応変な対応力の大切さを話す。初めて顔を合わせるクラスメートの前でしゃべるという経験に戸惑いと緊張の空気が漂ったが、好きな漫画やスポーツの話を始めると1分では収まりきれない話し手も。

全員の自己紹介に続き、名札作りのワークが行われた。「私は名刺に入れている〝さつつん〟に助けられています」。小さな名刺の中にも会話の糸口を作ることがコミュニケーションの第一歩、と森先生は伝える。

生み出された授業メソッド

今年度の「初年次セミナー」の授業において、知識やスキルを学ぶセクションでは反復学習の可能なオンデマンド（動画配信）、ディスカッションを行う場合はオンライン（同時配信）と、ICT（情報通信技術）のフレキシブルな活用と並行して対面授業が導入された。まさに、新型コロナウイルス対応を契機に生み出された、新しい授業メソッドだ。

受講した理学部の山田康太さんは「自己紹介のプレゼンを通して、思いを簡潔に伝えるということが大事だと感じました。いま友達を作ることが難しい状況もありますが、機会があれば、自分から積極的にいろんな人と会話して、人脈を増やしていきたいと思います。今日の授業は、貴重な経験でした」と、感想を語った。

森　裕生（もり・ゆうき）助教

鹿児島大学 総合教育機構 高等教育研究開発センター

［学位］博士（人間科学）

［学外略歴］早稲田大学 人間科学学術院、助手、2015年04月 ～ 2017年09月

［所属学会］日本教育工学会、大学教育学会

［専門分野］教育工学、大学教育、学習科学

［研究テーマ］学習ポートフォリオを活用した大学生の学習・振り返りの支援

OBOG INTERVIEW

先輩からのメッセージ

科学の楽しみを子どもたちに伝えたい。積極的な情報収集と幅広い経験を糧に、日々全力投球

鹿児島市立科学館　科学指導員　坂本 桂子（さかもと けいこ）

鹿児島県出身。2008年3月　鹿児島大学水産学部 水産学科海洋資源生物化学卒業。製薬会社勤務等を経て2013年、鹿児島市立科学館入職、現在に至る。

鹿児島市立科学館の科学指導員として、毎日3回（土・日・祝日は4回）行われる実験ショーを担当しているのが本学水産学部ＯＧの坂本桂子さんです。2週間ごとに変わるプログラムは「ドキドキ!! 燃焼・爆発」「超低温の世界」「グルグル・回転の科学」など、バラエティ豊富なメニューがラインナップ。テーマや構成、目をひくタイトル作成も、坂本さんらがアイディアを凝らしたものです。「子どもたちに少しでも興味を持ってもらえるよう、見せ方を工夫する努力をしています。そのためには、自分がまず興味を持つことが大切。自分がやってみて、楽しい、すごいと思ったものを出すようにしています」。自分が良いと思っていないと、その魅力を伝えることができず、相手の心を動かすことができないから、と坂本さん。「このことは、学生時代のプレゼンテーションをはじめ、社会人のどんな仕事に対しても言えることだと思います」

現在の仕事の原点は、小学校時代の理科の時間にあります。「実験の前、先生が科学を使った手品を見せてくれて、それがとても不思議で、楽しくて。私も不思議な実験がしてみたい、と科学クラブにも入りました」。高校進学後も理系を選択。大学で水産学部を選んだ理由は、「子どもの頃から吹上浜によく行っていて、海が好きでした。水産学部は食品系、生物系、化学系、物理系と、研究室が多岐にわたるところも魅力的だと思いました」。ゼミでは魚の色素についての研究を手がけ、同時に教育学部に通って高校教員免許も取得。純粋な科学の楽しさを見学者に伝えるワークショップ「大道仮説実験」にスタッフとして参加するなど、関心のある分野に関する学びを積極的に深めました。大学生活の中で、科学の力で人の役に立てる仕事や、理科教育の普及に係わる仕事に就きたいという思いが強くなっていた坂本さん。卒業後は医薬品開発研究機関に就職しました。仕事は充実し、やりがいを感じていたそうですが、社内での異動を機に退職を決意。次に子どもたちに地球温暖化について啓発する仕事に就きました。「契約社員だったので、社会人としての先行きは見えませんでしたが、子どもたちの前でのパフォーマンスを行った経験が今に生きています」。その頃、タイミングよく見かけた市立科学館の職員採用試験に挑戦。経験と意欲を買われた坂本さんは、念願の仕事に就くことができました。

「いま私は、興味のあることを仕事にできているので恵まれていると思いますが、どんな環境にあっても、そこで少しでも興味を持てるものを探してみるとよいと思います。どんな経験がいつ何に生かされるかわかりません。学生のみなさんも、いろんなことに興味を持ち、いろんなことに挑戦し、その経験を社会に生かしていってほしいと思います」。自身の経験から、後輩へのメッセージを伝えてくれました。

1大学の研究室での様子。海生生物の色素が持つ抗酸化作用を研究。実験をしている様子が楽しそうだと友人が撮ってくれた一枚　2「空気で浮かそう」の実験ショー。風の力でカップラーメンの容器がUFOのように浮かぶのが不思議　3網の上で逆さまにしてもこぼれない水。科学館でしか見られない実験だけでなく、家庭でもできる実験も人気　4科学館人気No.1の「空気砲実験」の様子。子供たちの歓声や驚いた顔を見ると、とてもやりがいを感じるとのこと

Scholar Interview

研究室から

水産学部

小谷 知也 教授

養殖業を支える仔稚魚の育成と初期餌料の研究・開発を通じ、国内外の水産業と食生活に貢献。天然海産資源に依存しない給餌技術“NASA計画”実現を目指して

ヒラメやマダイ、クロマグロ、カンパチ、ウナギ等々。国内の天然水産物の漁獲量が減少する近年、質の高い魚介類を効率的に生産する養殖技術へのニーズは、より一層高まりをみせている。多岐にわたる養殖技術の中で、仔稚魚介類※の育成と初期餌料の研究開発において国内外で数々の成果をあげる種苗生産研究の第一人者が、本学の水産増殖学研究室を主宰する小谷知也先生だ。

＊赤ちゃん魚には、生きた餌

「マダイやヒラメ、トラフグ、クロマグロといった魚の赤ちゃんは消化器官が未発達なため、魚粉などを固めて作られた配合飼料を消化することができません。人間の赤ちゃんと同じように、ベビーフードやミルクのようなものが必要なのです」。孵化したばかりの仔魚は口が開いておらず、体内に抱えた「卵のう」から栄養を摂取して成長し、口が開くと外部栄養(餌)を取り込むようになる。養殖下では、魚が口を開く時期に与える餌

が、まさに生死を分かつ。「消化器官が未発達ということもありますが、そもそも静止した餌には見向きもしない。生きた餌、生物餌料についての研究が盛んに行われている所以です」。現在、国内の生物餌料の主流を占めているのは、海産ツボワムシ類や甲殻類のアルテミアなどの動物プランクトン。小谷先生は、海産ツボワムシ類の種の研究を振り出しに、ハワイの研究所で観賞魚の餌となるカイアシ類の培養に成功した実績を持つ、生物餌料のオーソリティである。

＊餌の餌にこだわる

生物餌料として海産ツボワムシ類を活用するには、栄養素不足という障壁を乗り越える必要があるという。「海産ツボワムシ類にはDHAやEPAなどの栄養素がほとんど含有されていません。一方、ヒラメやマダイなどの赤ちゃんは、それらの栄養がないと生きていけないのです」。海産ツボワムシ類の栄養強化に関する技術開発が進められ、十数年前には、ある程度の技術が確立された。「それでも、まだ改良の余地があると考え、海産ツボワムシ類の栄養強化の効率化に関する研究を10年余り手がけてきました」。ハワイで研究していた天然のカイアシ類との比較検討を行うなど、試行錯誤の末、小谷先生はDHA、EPAを豊富に含む天然植物プランクトンであるイソクリシスを、何世代にもわたって海産ツボワムシ類に給餌することで栄養強化するという発想に行き着いた。

イソクリシスはまた、鹿児島県の水産業を代表するウナギ養殖への大きな手掛かりともなる、と小谷先生は考えている。「ウナギの餌は、海中を漂うマリンスノーだと言われています。マリンスノーの正体は、動植物プランクトンの死骸や魚の排泄物です。大量の植物プランクトンがあれば、マリンスノーを人工的に作ることができるはずです」。ウナギの仔魚（レプトケファルス）の餌料に関する研究とともに、小谷研究室では現在、自然に近い形でのウナギの繁殖に関する研究も進行中だ。「ウナギの研究は、本来の私の専門からは外れているのですが、魚の赤ちゃんを育てるだけではなく、親魚を育てるというところも含めてはじめて、種苗生産を全て網羅することになるのです」。

小谷研究室では社会福祉法人 博楽福祉會（南さつま市）の運営する就労支援事業所ボヌールと連携し、2017年より、同事業所のプールを活用してイソクリシスの大量培養へ向けた共同研究を継続している。

＊宇宙で養殖しよう！NASA計画へのチャレンジ

「現在、天然の魚介類が捕れなくなっているなか、養殖は海産資源に依存せざるを得ないという矛盾をはらんでいます。養殖用の餌の価格が高騰しているという現実的な問題もあります。植物プランクトンの大量培養を通じ、効率的で安定的な生物餌料生産のサイクルが完成すれば、天然海産物に依存しない養殖の実現が可能になる」と小谷先生は希望を語る。「海の魚に依存しない養殖のサイクルを作ることができれば、宇宙ステーションでの魚介類養殖も実現可能になります。〝NASA計画〟と名づけ、研究を進めているところです。研究に協力してくれる企業も現れました。実際にNASAが採用してくれるかは未定ですが、夢は大きい方がいい」。市場に〝宇宙魚〟が並ぶ日も、そう遠くない。

※仔魚：卵からふ化して骨格やひれ、消化管などの器官が未発達な魚。オタマジャクシのような形のものが多い。
※稚魚：ひれに鰭条（きじょう）と呼ばれるスジが現れ、スジの数が親と同数になった子どもを稚魚と呼ぶ。魚の種類によっては、仔魚から稚魚にかけて体の形が大きく変わるものも見られ、この変化は「変態」と呼ばれる。

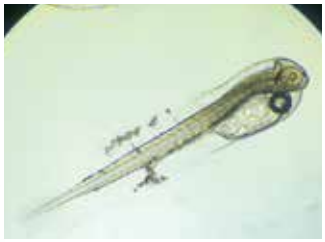
Profile 小谷　知也（こたに・ともなり）

長崎大学大学院 博士課程1999年9月修了、Oceanic Institute客員研究員、長崎県産業振興財団 研究員、福山大学生命工学部 准教授、鹿児島大学農水産獣医学域水産学系 水産学部水産学科 准教授を経て2018年10月より現職

■所属学会：Asian Fisheries Society、European Aquaculture Society、World Aquaculture Society、日本魚病学会、日本プランクトン学会、日本水産増殖学会、日本水産学会

■専門分野：種苗生産、水圏生命科学

■研究テーマ：○海産ツボワムシ類の培養方法の違いが生物学的特性、生理活性および栄養強化成績におよぼす影響について ○海産カイアシ類大量培養法の開発・海産魚類種苗生産における餌料系列の見直し



マダイ仔魚（ふ化直後）。卵黄が残っており、口はまだ開いていない。

ふ化直後の仔魚のサンプリングの様子。学生総出で取りかかります。

知のタネ Needs Seeds

第五回

行政課題の解決を目的とする法政策における手法についての研究

法文学部
宇那木 正寛 教授

appeal point 1. 法政策の立案に関する最新の研究成果について、論文誌だけではなく、実務者向けの専門誌や全国での講演会やセミナーを通じて、情報発信を行っています。

appeal point 2. 自治体における法務人材の育成を目的として全国の研修機関において、講義などを行っています。

研究の背景および目的

【行政課題の解決に必要な法政策の立案を目指す】

少子高齢化やこれに伴う扶助費の急激な増大、人口流出による地域社会の疲弊、企業の国際的競争力の低下、大規模災害対策、新型コロナウイルスなどの感染症対策をはじめ、近年我が国の社会経済環境は大きく変化しています。

この変化は、これまでの国家または地域経営のあり方について大きな発想の転換と構造改革を求めるものとなっています。

こうした行政課題に対処するため、国や自治体は、国家あるいは、地域の経営主体として、多様な行政活動形式を用いた積極的な政策の展開が求められています。法政策を憲法価値に適うように、また、有効かつ効果的に執行するためには、法政策自体を法律や条例といったルール(規範)として定める必要があります。こうしたルール化に際しては、どのような視点で、何に重点を置いて考えればよいのか。この答えを、行政法学における理論を通じて、明らかにする研究をしています。

特に、近年は、科学研究費の採択を得て、空き家の除却、不適正処理された廃棄物や放置船舶の撤去など公共に生じた危険を除去するための行政代執行制度についての研究を中心に行っています。

取組の特徴

【実践的かつ有効な法政策を提案】

公務員として勤務した25年間、市税の滞納整理、例規審査、訟務、情報公開・個人情報保護、市長政策秘書、病院経営改革、法務人材の育成、環境政策などの業務を担当しました。こうした経験を生かし、研究では、法執行における臨床面を重視しています。

研究成果を実務の現場で生かせるよう、研究テーマの設定はもとより、研究活動においても、できる限り行政の現場へ出かけたうえで、資料を収集し、関係者にインタビューをするなどのフィールドワークを心掛けています。

法律学の研究では、法令や判例など既存の資料を利用した書斎型の研究手法が多いことも事実です。しかし、法律学が現実に社会で生ずる人々の社会経済活動やそれに伴う紛争を対象とする学問であることから、フィールドワークのような実地研究も重要であると考えています。こうした実地研究により、思いもつかなかった研究の視点を得ることも少なくありません。また、多くの行政現場を実地研究の対象とすることで、情報入手のためのネットワークの構築も可能となります。引用文献の多さだけが、研究価値を決するものではありません。

こうした研究手法による最新の成果はできる限り早く多くの行政関係者に伝えられるように、論文誌での発表だけではなく、実務専門雑誌への連載、全国各所での講演、セミナーなどを行っています。

さらに、このような研究成果を生かすためには、行政側の人材育成も重要となります。この観点から、全国市町村中央研修所、全国市町村国際文化研修所などをはじめ全国の研修機関において、講義などを行っています。加えて、私のゼミでは、公務員志望の学生が多いことから実践的能力が身につく教育を行っています。

取り組み事例

現場教育の重視

私が担当する法政策論・行政法務論ゼミでは、公務員志望者が多いことから、その活動の一環として行政課題や法政策について学び、また、将来のキャリアパスを考える材料とするため、官公庁などを積極的に訪問しています。たとえば、実地調査を行うという私の研究スタイルに沿い、日本で最初に景観保護条例を制定した金沢市と倉敷市を訪問するなどして、法政策の課題についてフィールドワークを行いました。また、私自身の人脈を生かし、現役の市長や副知事、最高裁裁判官など行政や司法のトップ層とゼミ生が直接の意見交換をする機会を設けています。なお、これらのフィールドワークや意見交換の様子は、大学のホームページで紹介されています。

自治体職員向け図書の発刊

今年8月に『地方公務員 仕事のきほん』を総務省や全国の自治体に所属する仲間らと発刊しました。同書は、地方公務員試験に合格した学生や入庁1年目から3年目までくらいの職員を対象に執筆したものです。

同書は、社会人としての心構え、公務員の仕事や地方自治の仕組みについてのエッセンスをわかりやすく示すことを基本としていますが、同時に高い倫理観をもって公務に臨むことができるように様々な工夫を凝らした内容となっています。

実務専門誌を通じて研究成果を速やかに提供

最新の研究成果をいち早く、かつ、その成果をわかりやすく提供するために、「自治体職員のための政策立案入門」と題して『自治体法務研究』という実務専門誌での連載を行っています。季刊誌ですが既に10年近くの連載となりました。岡山県美咲町では、同町が防犯カメラを設置・管理するに当たり、「自治体における防犯カメラ政策」をテーマとした連載を参考に「美咲町防犯カメラの設置及び管理運用に関する条例」が制定されるなどしています。また、紙面上に限らず、講演会やセミナーを通じて研究成果をより速やかに提供をするなどの活動も行っています。

鹿大メッセージ

法文学部教授　宇那木 正寛（うなき・まさひろ）

過去には、公務員に対する不合理なバッシングもありました。しかし、東日本大震災をはじめ近年の大災害における自己の生命をも顧みない献身的な姿は、多くの国民の共感を呼びました。

国家公務員や地方公務員の仕事は、その性格上、国民の厳しい目で評価されているのも事実ですが、とてもやりがいのあるものです。また、県や市町村の公務員であれば、地域に根ざした様々な業務に従事でき、その成果を実感できるという魅力もあります。私自身の公務員時代を振り返ると、条例の立案や法律上の紛争への対応などの法務中心の仕事でした。それでも、市立病院の経営改革や組織の行政対象暴力への対応などの特異な行政分野での経験を積むこともできました。さらに、戦後最大の都市型災害である阪神・淡路大震災の際に、神戸市長田区に設置された避難所の管理者として勤務したこともあります。このときは、避難中であった住民の方の葬儀を執り行うなど辛いこともありましたが、災害と行政の役割を考えるうえで貴重な機会となりました。

仕事を通じて自己の成長を目指したい、人の幸せのために働きたいと望む人にとって、公務員は、それに応えてくれる仕事の一つです。既に、多くの鹿大卒業生が、鹿児島県庁や鹿児島市役所に入庁するなどして地域経営を支えています。先輩方の活躍もあり、鹿大出身者は高く評価されています。文系・理系を問わず多くの鹿大生が公務員という仕事に興味をもって欲しいと思います。近年では、職務経験を生かして議員、弁護士、研究者に転身するなど多方面で活躍する公務員OBも増えています。公務員としての進路を考えている学生には、できる限りの情報を提供します。遠慮なく私の研究室を訪問してください。

Profile

1987年3月　広島大学法学部卒業
同　　年4月　岡山市役所入庁
2009年10月　岡山大学大学院社会文化科学研究科非常勤講師（2014年2月迄）
2014年4月　鹿児島大学法文学部准教授
2016年4月　鹿児島大学学術研究院法文教育学域法文学系教授

自治体からのメッセージ

鹿児島県副知事　岩切 剛志（いわきり・たけし）

令和2年は、従来の国と地方の関係を見直し、国と自治体との対等・協力関係の確立を目的とする地方分権一括法が施行されて20年の節目となる年に当たります。同法により、国の事務を自治体の機関がその委任を受けて行う機関委任事務制度が廃止され、その多くは地域の事務として位置づけられました。この結果、自治体の条例制定権の範囲は大きく広がっているところです。

地方分権下の自治体においては、こうした条例制定権を活用して、政策条例を立案し、地域の課題を主体的かつ積極的に解決することが求められています。また、あわせて、情勢の変化や地域の実情に応じて改正を行うことも求められます。このうち、条例の制定、特に住民に対する規制的内容を定める政策条例の立案プロセスにおいては、克服すべき法的問題が生ずることも少なくありません。

この際、条例を立案する自治体において、法律上の専門的知見を有する研究者の意見を聴取するなどして問題解決に当たることが必要とされる場合もあります。このような場合において、25年余りの自治体における多彩な勤務経験を生かした宇那木教授の研究成果やそれに基づく知見は、自治体が条例制定権を有効かつ適法に行使する際の大きな助けになってくれるものと期待しています。

産学連携に関する相談・お問い合わせ窓口：産学・地域共創センター　☎099-285-8491

・令和２年度名誉教授称号記授与式を挙行

７月２日、事務局特別会議室において、令和２年度名誉教授称号記授与式を挙行しました。

名誉教授の称号は、本学の教授として15年以上在籍し、教育上、学術上または本学の運営上特に功績があった等の方に授与するものです。今年度は15名の先生方に名誉教授の称号を授与することとなり、式に出席された８名の先生方に、佐野 輝学長が称号記を授与しました。

佐野学長は挨拶の中で「先生方のご功績を称え、名誉教授の称号記を授与できることが誠に嬉しく、本学を代表しお慶び申し上げます。」と祝辞を述べるとともに、「先生方は、法人化前後も含め、大学改革が求められているこの激動の時期にも、本学をしっかりと支えてくださった。これからもご助言やご支援をいただき、大学 OB として、また大学の応援団として、本学のためにお力をいただきたい」と、長きにわたり本学に貢献された先生方に謝意を表しました。また佐野学長は、昨今の新型コロナウイルス感染拡大についても触れ、「18歳人口の減少や苦しい財政状況など、本学を取り巻く環境は厳しいが、教職員一丸となり、地域社会ならびに国際社会に貢献する『光り輝く』鹿児島大学を目指したい」と述べました。

・公益財団法人米盛誠心育成会研究助成目録贈呈式を開催

７月10日、令和２年度公益財団法人米盛誠心育成会研究助成目録贈呈式が鹿児島大学で行われました。

同研究助成は、公益財団法人米盛誠心育成会から、鹿児島県の資源、風土に立脚し、基礎的・学術的に優れた研究に対し研究助成金が贈られるものです。今年度は、本学から新規４件、継続２件の研究が選考されました。

贈呈式では、米盛庄一郎米盛誠心育成会理事長から研究者へ研究助成目録が贈呈され、「平成20年度から支援を続けている桜島大根の機能性評価の端緒から地域資源の良さが見直され、食材活用の機運が盛り上がっていることに、助成金事業の目的であります本県産業の活性化に貢献できるのではと期待しています。研究助成金としては少額ですが、鹿児島大学など地元研究機関の方々の支援ができますことを、大きな喜びとしております。当財団の支援で取り組まれた研究が呼び水となり、さらに高度レベルの支援に結びつくことを願っています。」と挨拶がありました。

続いて、佐野 輝学長は、「平成４年からの長年にわたるご支援に心より感謝します。今回、助成対象となった研究テーマは、地域社会と密接に関連するものであり、鹿児島県の産業の発展や地域社会の課題解決に大いに貢献するものと期待されます。米盛誠心育成会の皆様方には今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願いします。」と謝辞を述べました。

・鹿児島大学稲盛記念館「京都賞ライブラリー」内覧会を開催

７月29日、稲盛記念館3階にて「京都賞ライブラリー」内覧会を開催しました。

本内覧会は、令和元年12月の稲盛記念館オープニングの際には整備中であった５面マルチ及び４面タッチパネルが整備完了となり、一般公開に先駆けて、報道機関各社を対象に開催したものです。

内覧会では、稲盛アカデミー長を務める武隈晃理事（教育担当）の開会挨拶の後、佐野輝学長から、完成の喜びと感謝に加え、「一人でも多くの学生や一般の皆さま方に、ぜひ、見て触れてほしい」と挨拶がありました。

続いて、檜物省一稲盛財団常務理事から、稲盛和夫名誉会長も内覧会の開催を大いに喜ばれている旨の報告と、稲盛財団及び国際賞「京都賞」についての説明等がありました。

最後に、武隈晃理事から、京都賞ライブラリーの概要説明とタッチパネルの操作方法について具体的な説明があり、質疑応答では、記者の皆さんから多数の質問が寄せられ、佐野輝学長と檜物省一稲盛財団常務理事が一つ一つ丁寧に回答し、「今後は、更にコンテンツを充実させ、幅広く一般の方々に京都賞について深く理解してもらう場にしたい」と締めくくりました。

・令和２年度種村完司私費外国人留学生奨学金授与式を開催

７月30日、令和２年度種村完司私費外国人留学生奨学金授与式が開催され、佐野 輝学長から、出席した２名の私費外国人留学生に目録が授与されました。

本奨学金は、種村完司鹿児島大学名誉教授（元本学教育・学生担当理事）が理事在任時代に私費外国人留学生が経済的に厳しい状況であることに鑑み、少しでも金銭面で支援し勉学に専念できるようにと種村名誉教授の寄附により設立されたもので、今年も５名の留学生に授与されました。

授与式では、佐野学長から奨学金設立の経緯紹介と留学生への祝福および期待の挨拶があり、続いて種村名誉教授から「私費外国人留学生が経済的事情からアルバイトに時間を費やしている現状を改善したく、少しでも学業に専念できるように本奨学金制度を設立しました。今後もぜひ勉学に励んでください。」と激励の挨拶がありました。

留学生を代表して、法文学部の殷（イン） 健杰（ケンケイ）さんから「今年流行している新型コロナウイルスの影響により、世界中が未曾有の経済打撃をうけています。この奨学金により、私たちの経済的不安が軽減され、より多くの時間を学問に費やすことができるだけではなく、精神的にも大学からの温かい支えを感じることができます。改めて、種村先生のご支援に厚く御礼を申し上げます。今後、感謝の気持ちを忘れずに、社会に還元できるように頑張っていきます。」と感謝と抱負が述べられました。

・令和２年度前期鹿児島大学留学生後援会奨学金授与式を開催

７月30日、令和２年度前期鹿児島大学留学生後援会奨学金授与式を開催しました。

本奨学金は、鹿児島大学留学生後援会が私費外国人留学生に対して経済的支援を行うことで学習効果を高めることを目的として支給しているもので、７名の留学生へ奨学金を授与しました。

授与式では、後援会会長である佐野 輝学長が、出席した６名に奨学金を手渡され、「世界が新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け大変な状態の中で、留学生の皆様も不慣れな異国の地での生活に苦労しながら、自己の目的を達成するために勉学に励んでおられます。これからも積極的に学ぶ姿勢を持ち続け研鑽を積むことにより自己の目的を達成するとともに、留学を終え帰国した後も日本及び鹿児島とのつながりを持ち続け、母国との懸け橋になっていただくことを期待します。」と激励の言葉を贈りました。

留学生を代表して、法文学部の陳（チン） 宇航（ウコウ）さんから、「奨学生に採用していただき、大変嬉しく、光栄に思っております。この奨学金奨学生に採用されたことが自分たちの前に進むモチベーションであり、努力する責任でもあります。今後も責任を持ち、前向きな姿勢で頑張っていきたいと思います。」と感謝と抱負が述べられました。

・オンラインオープンキャンパスを開催

８月24日～８月28日、オープンキャンパスを開催しました。本年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、９学部を紹介する動画の公開やオンライン個別相談等の他、Zoom を活用した学生との交流イベントなど、オンラインでの代替企画を中心に開催しました。

女子高校生を主な対象とした「鹿大の先輩女子に聞く！」は全学部で実施し、そのうち共同獣医学部の部では、川畑 和泉さん（２年）とクォン・ミョンヒョンさん（６年）が参加し、大学進学を目指す高校生と Zoom を通じて交流しました。川畑さんからは共同獣医学部に入学した理由や学生生活の過ごし方、クォンさんからは6年生のスケジュールや長期の臨床実習等について説明がありました。

高校生から「大学生活で楽しいこと、辛いことは？」と聞かれると、川畑さんは「基本的に楽しい。辛いのは解剖実習」と回答。クォンさんも同意見とし、「動物が好きだからこそ解剖は辛いもの」と語りました。

また、入試課の職員による個別相談には、東京、横浜、離島など遠方からも多くの参加があり、マンツーマンでの相談を終えた参加者からは、「オンラインだからこそ相談できた」との感想が寄せられました。

鹿大ジャーナル KADAI JOURNAL
鹿大広報
https://www.kagoshima-u.ac.jp/
NO.215
2020 AUTUMN

CONTENTS

特集 2
薩摩からSATSUMAへ
～世界へ羽ばたく
グローカル人材育成への挑戦～

潜入ルポ ～学びの部屋～ 8
「初年次セミナーⅡ」
（共通教育科目）
総合教育機構　高等教育研究開発センター
森　裕生 助教

先輩からのメッセージ 10
鹿児島市立科学館　科学指導員
坂本 桂子 さん

Scholar Interview ～研究室から～ 12
水産学部
小谷 知也 教授

知のタネ 14
行政課題の解決を目的とする
法政策における手法についての研究
法文学部
宇那木 正寛 教授

鹿大トピックス 16
鹿児島大学とJALグループが
連携協力協定を締結
ほか

進め！鹿大生 19
カバディ同好会部長
法文学部法経社会学科法学コース3年
井上 奎史 さん

鹿大プラス 20
有機長命草シリーズ

・奄美大島における「リュウキュウアユ」の食性を11月に学術誌で発表

水産学部の久米 元准教授が、世界自然遺産の登録を目指す奄美大島の河川のみに生息する環境省絶滅危惧種指定「リュウキュウアユ」に関する生態知見を明らかにし、その研究成果が令和２年11月発行の「魚類学雑誌」に掲載されました。

本研究成果は、奄美大島の3河川でのリュウキュウアユの摂餌調査を通じ、リュウキュウアユは屋久島以北に広く生息しているアユとは異なり、ほとんど付着藻類を摂餌できていないことを明らかにしたものです。これは、リュウキュウアユが非常に過酷な餌環境条件下で生活していること、生息している奄美大島の河川では生産性が低いことを意味しています。

久米准教授は、奄美大島の世界自然遺産登録と同様に、奄美大島の河川のみに生息するリュウキュウアユを守っていく取り組みが必要と考え、引き続き、リュウキュウアユの個体数の増減を引き起こす要因について調査を進め、生物の多様性を守るための適切な保全策を提言できるようにしたいと研究への強い意気込みを語りました。

・鹿児島大学とJALグループが連携協力協定を締結

10月５日、鹿児島大学と JAL グループは鹿児島大学稲盛記念館にて、地域に密着したパイロット人財創出のための連携協力協定を締結しました。

本協定は、本学と日本航空株式会社（JAL）、日本エアコミューター株式会社（JAC）が、西日本の地域と地域及び鹿児島県を中心とした離島の空の足を永続的・安定的に支えていくために、パイロットを目指す人財の裾野の拡大、人財発掘、育成について三者で連携協力することを目的に締結したものです。締結式では、協定書へ署名後、越智健一郎日本エアコミューター株式会社社長、立花宗和日本航空株式会社執行役員運航本部長、佐野輝学長からそれぞれ挨拶があり、三者が力をあわせて地域貢献を目指していくこと、また、本協定の実現の橋渡しである稲盛和夫鹿児島大学名誉博士への謝辞が述べられました。

引き続き、稲盛名誉博士からのメッセージを武隈 晃鹿児島大学稲盛アカデミー長が代読。本協定が、パイロットになり故郷に貢献したいという若者の美しい思いを受けとめ、実現を後押しするとともに、鹿児島大学、日本航空、日本エアコミューターの発展を促し、さらには鹿児島の離島の皆さんの暮らしを支えるものとなることへの願いが伝えられました。

今後、本協定に基づき、本学の学生より希望者を募り８名の学生に対し、飛行操縦体験 SKYCAMP への参加機会を提供。その中でパイロットとしての適性に優れた２名には、本学、JAL、JAC の三者による資金援助の下、パイロットライセンス取得訓練を実施することとしています。本協定により、学生の新たな能力を開発し、地域振興及び域内の経済発展に貢献することを目指しています。

鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い
鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象となります。
【お問い合わせ先】　鹿児島大学総務課基金・渉外係
TEL:099-285-3101　FAX:099-285-7034
E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp
基金ホームページ: https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/

鹿児島大学 古本募金
読み終えた本・DVD等でご支援ください
詳細・お問い合わせ
鹿児島大学 古本募金
0120-29-7000（電話受付）9～18時・365日
運営協賛：古本募金きしゃぽん（緑建興株式会社）

インド数千年の伝統競技を鹿児島に初導入した鹿大生の熱量。創設4年で西日本を制覇！

進め！鹿大生

カバディ同好会部長
法文学部法経社会学科法学コース3年

井上 奎史 さん

Inoue Keishi

「カバディ」というマントラを唱え続けながら、相手チームのコートに身体ひとつで攻め込む競技・カバディ。南インド古来の競技で、インドではクリケットと並ぶ国民的人気を誇っています。本学のカバディ同好会は、鹿児島初のカバディチーム。4年前、法文学部の國料大夢さん（法政策学科4年生）が中心となって創設しました。「練習方法もわからなさすぎて、他チームの動画を見て研究するほか、東京の（一社）日本カバディ協会に電話で指導をお願いしました」。チームの熱意に応え、アジア大会銅メダリストが来鹿し、直接指導を受けたことも。

現在、部長を務める井上奎史さんは富山県出身。中学までは野球、高校では陸上に励んでいましたが、「鹿大でカバディに出あってハマりました」。その魅力について「攻める時は個人競技、守備ではチーム競技という二面性があるところが、他の競技にはない面白さ」と語ります。

2019年9月に開催された「第16回 西日本カバディ選手権」において、チームは優勝を勝ち取りました。今年度は、残念ながら試合が見送られましたが、来年度以降は同選手権の連覇と、全国学生カバディ選手権大会での優勝を目指します。メンバーは、卒業後も、大学院や就職先など、行った先々で新チームを創設し、日本にカバディ人口を増やしたいという志を持っています。

座右の銘

「成せばなる」

上杉鷹山という米沢藩主の言葉です。「やったら努力は実るし、それでも足りないときは、まだ頑張るしかないよ」と、小学校の卒業式の日に担任の先生からもらった言葉を大事にしています。（井上さん）

「人生万事塞翁が馬」

長い人生のうち、いろんなことに挑戦していく中で、いいことも悪いことも起こると思いますが、見方を変えれば悪いことも良いことに転ずると思うので、一喜一憂せず、前向きに進んでいきたいと思います。（國料さん）

「死ぬ気でやれ　死なないから」

これまで努力とは無縁の自分でしたが、昨年、全日本強化選手に選ばれ、初めて本気で体づくりに取り組みました。結果が出ず、辛い時期もありましたが、自分を変えることができたことは大きな糧となりました。（法文学部人文学科多元地域文化コース4年 東別府 心さん：前部長、日本代表チーム選手）

第16回 西日本カバディ選手権での試合風景

前列左端：創設者の國料さん、後列左端：前部長で全日本代表選手の東別府さん、前列右から2番目：現部長の井上さん

現在、毎週月曜日16:30～19:00 鹿児島大学郡元キャンパス第一体育館において練習を行っています。興味を持った方はぜひ覗いてください！（体育館の使用が可能になった場合、土曜日16:30～練習再開します。女子も歓迎☆）

KADAI PLUS

鹿大プラス

鹿大プラスでは、鹿児島大学インフォメーションセンターで販売している鹿児島大学の研究・教育活動の成果として完成した商品を紹介します。

有機長命草シリーズ

有機長命草ティーバッグ　3g×30包:1,600円(税込)
有機長命草青汁パウダー　60g入り:1,600円(税込)
有機長命草青汁スティック　5g×30包:3,800円(税込)

南国の太陽と大地からうまれた無農薬栽培パワーベジタブル。
「南さつま長命草」にはポリフェノールやカルシウム、カリウム、ビタミンAやビタミンCなど豊富な栄養成分が含まれており、からだの中からキレイを目指します！
本学と南さつま市ならびに株式会社アトピーラボの共同研究としての成果物、ぜひご賞味あれ。

お求め・お問い合わせ先　**インフォメーションセンター**(鹿児島大学正門横)
☎099-285-3864　開館時間:月曜日～金曜日(休日・祝祭日を除く)　9:30～16:30(昼休み13:00～14:00)

今号の表紙「島津家別邸 仙巌園」

1658(万治元)年、島津家19代当主・光久によって築かれた島津家別邸。桜島、錦江湾という雄大な景観を取り入れた約1万5千坪の広大な庭園には、御殿のほか朱塗りの門や石灯籠、竹林などが配され、中国・琉球文化の影響を受けた薩摩文化の粋を今に伝えています。一方、日本の近代化をリードした集成館事業の本拠地でもあったことから2015年、世界文化遺産の構成資産に登録されました。
昭和に入ってからは毎秋、菊まつりが開催されており、今年61回を迎えました。期間中、菊人形や菊花三重塔など、職人が手塩にかけた絢爛豪華な花々が大名庭園を秋色に染めあげます。

鹿大ジャーナル movie
One Minute
動画配信中!!

●編集・発行／鹿児島大学広報センター
〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21番24号　TEL: 099-285-7035　FAX: 099-285-3854　E-mail: sbunsho@kuas.kagoshima-u.ac.jp
2020年 11月発行